

# ヒロインかもしれない。1

*Suzuka & Fumitaka*

---

深月織

*Sbiki Mitouki*

termity



エタニティ文庫

## 目次

王子様がお待ちかね 5

手を伸ばす先に 137

Lady,Go 257

書き下ろし番外編  
「フミタカさん」の謎 353

王子様がお待ちかね

無邪気な少女だった頃、夢見ていた。

いつか、王子様が。

大きくなり、自分のレベルを自覚するにつれ、そんな夢は見なくなっただけ。

王子様が迎えに来るのは特別なひとだけ。

王子様が見つめるのはお姫様だけ。

例えるならば「村娘その3」レベルのあたしは、そのうち「村の若者その6」と見合  
いでもしてなんなくまとまり、よくいる「村の住民1」になるのだと早いうちから理解  
していた。

木内鈴鹿きうちすずか二十五歳。

OL七年目の、ある日のこと。

## 1

「今日、給料日だろ？ 帰り、食事でも行くか」

世間話のついでのように言われた言葉に、あたしはパチリと目を瞬またかせた。

「はあ、いいですよ」

そう、気のない返事を返す。

適当に答えたわけじゃない。会話の相手である彼——南条専務なんじょうは、今でこそ一介の  
秘書ごときが気安く口をきける相手ではなくなってしまったけれど、もともとは同期の  
仲間だ。

「よし、じゃあまたあとで」

あたしの返事に気をよくしたのか、彼は眼鏡の奥の鋭い瞳を和ませる。そして、手に  
していた丸めた書類でぼむぼむとこちらの頭を軽く叩いてから、自分の部屋へ戻って  
いった。

何なんだ。

親しみを込めて叩かれた頭を押さえ、首を傾げる。最近、謎の行動多いんだよね、あ

のひと。

暇なんだか知らないけど——なんて嘘。秘書室のデータベースにアクセスすれば、彼の予定がびっしり詰まっていることは確認できる。重役のスケジュールデータの打ち込み担当、あたしですから。忙しいせに通りかかるとこにこっちに来て無駄話をしたり、やたら仕事を頼んできたりするのも謎。確かにうちの秘書室は、専属が決まってないひとだったら誰が誰を使おうが構わないってことになってるけどさ。

アレだな、多分、都合がいいからだろうな。だって、あたしは勘違いしないもの。

「いいなあ。専務とデートおろ、鈴鹿ちゃんズルイッ」

パーティションの上から顔を出して、冗談っぽく、だけど実は本気の不満を覗かせて新山さんが言ってくる。あたしは苦笑を浮かべた。

「デートなんていいものじゃないですよ。いつものみんなと居酒屋でしょうし」

ことさら二人きりじゃないことを強調して、何でもないふりを装って普通に返す。ちよつとも隙を見せたら最後、何を吹聴されるかわからないからね。いろいろと気を使うのだ。

あたしと彼は、ただの同期で純粹な飲み仲間なのだと、どんなに言っても彼狙いの女子社員には信じてもらえない。

『そんなこと言って、ホントは狙ってるんでしょ』

『同期っていつても今はヒラと専務なんだから、少しは遠慮したら？』

『若さだけが取り柄の受付嬢だったくせに、厚かましいのよね』

ヒソヒソと交わされる、あたしからすれば言いがかりとも思える陰口。あるいは面と向かつての揶揄。

知るかつつうの。彼に近付きたいのなら、その玉の輿狙いのギラギラした目を上<sup>う</sup>手<sup>て</sup>く隠して、さっぱりした女を演じるがいい。彼の好みは自分に興味のないオンナ、なのだから。

——さきほどの彼、南条史鷹氏（三十一歳・独身・現在恋人なし）は、我が社の社長の甥っ子で、かつ跡取り候補とみなされている、若手一番の出世頭。

それだけでなく、他者の目をひきつける映画俳優なみの整ったルックス、その長身を印象付ける落ち着いた立ち居振舞い、さらに乙女のハートを釘付けにする心臓直撃魅惑のボイスという隠し技まで持つという、出来すぎでムカつくほどのイイ男でもある。

未婚既婚を問わず、多数の女子社員が彼を見て目の色を変えるのも不思議じゃない。当の本人は、若い頃はそりゃもう華やかな女性関係を繰り広げていらしたけれど、昇

進した頃から落ち着いてきたのか、それとも立場上遊んでばかりじゃやバイと思つたのか、女性との親密な交流を避け、男性社員と友好を深めている様子ぶうかがが窺える。

そりゃね、玉の輿狙いのオンナ共の相手をするより、将来、社のために働いてくれる仲間や部下と密な関係を作る方がいいよね。

あ、もちろん男ばかりじゃなくて、有能な女性社員にもちゃんと声をかけてたりする。自分に気のある素振りをしてないひと限定、つてのが徹底してるなあ、と思うけど。

特にそんな彼が、親しく言葉を交わす女、ということ、わたくし木内が檜玉ひのたまに上げられてる現状。みんながムキになるほど色っぽい関係じゃないのに、聞く耳みみみを持たないひとはいるワケで。今現在、その筆頭が――

「木内さん、この書類、まとめてデータ化しておいて。完成したらファイル添付で私に送ること」

――トゲトゲしい声と共に、目の前に紙の束を置いた、このひとなのだ。

顔を上げると、冷やかな表情の長船主任おさふねが、文句なんか言わせないわよ、とばかりにあたしを見下ろしていた。付箋ふせんのたくさんついたその書類を見て、訊ねる。

「わたしが処理してもよろしいのですか？」

「はあ？ 余計なこと言つてないでやりなさい、今日中に仕上げるのよ」

言いたいことだけ言つて、プイと席に戻る背中を見送り、ヤレヤレと頭を振った。

今日中ねえ。それはいいんだけど。

渡された書類をパラパラと捲めくりながら考えていると、脇からクスツと笑う声。

「タイヘンねえ、主任のあれ、完全に嫉妬あやまよお。今日中なんて無理よねえ、絶対デートの邪魔をしようと思つてるんだよ〜？」

口では同情めいたことを言つても、ザマアミロと目めが語かたつてますよ、新山さん。もめ事好きなんだから。

彼女の発言は受け流して、チェックに戻る。

いいのかなあ、コレ、来週早々の会議で使うやつなのになー。主任、内容を把握してるのかなー。

君にも補佐として出てもらうから、つて室長が言つてた気がするんだけどなー。

嫌がらせするにしたつて、ちよつと考えたほうがいいんじゃないかなー。

……まあいい。それで彼女が困ろうがあたしの知つたこつちゃない。

こつちは一応確認したもんね、いいんですか？ っつて。

予定になかつた押し付け仕事を何とか早めに終わらせるべく、あたしは外野をすべてシャットアウトして、パキパキと指を鳴らし、気合いを入れてパソコンに向き直つた。

あたし、木内鈴鹿は高卒採用で来生きすぎ商事に入社した、勤続七年目の二十五歳。

一年前、受付から秘書室に異動になった。

社員としてはわりと古株だけれど、ここでは新参者、ペーペー扱いなのだ。

学生時代IT関係の資格を取れるだけ取っていたあたしは、そのパソコンスキルを買われてこの会社に入った。故に、入社したら資格能力を活かせる事務系に配属されるものと思ひ込んでいた。

ところが新人研修後、辞令を受け、手渡されたのは受付嬢の華やかな制服。ひきつた笑みしか出ませんでしたよ。

受付って、社内では軽く見られがちだけれど、よそからやってくるひとにとっては、最初にその会社と接する場で。見栄えのいい綺麗どころが集められ、愛想よくかつ速やかに、問われたことに答えなきゃいけない、そういうイメージがあつた。

取り柄といったらびちびちのお肌だけ、平々凡々、この間まで女子高生だったコドモ丸出しな自分を、そんな玄関口に置いてもいいのかと、余計なお世話ながら思ったものだ。だけど、どんなに不向きだろうが、お仕事には変わりない。

入社早々クビになりたくなかったあたしは、必死で数種類の笑顔を会得し、挨拶はしっかりと、一度見えられた取引先の方の顔と名前は頭に叩き込む、ハキハキテキパキ動く、等々の心得を自分に課した。その頑張りが功を奏し、美貌はないけど愛嬌とやる気でお得意様にも名前を覚えていただき、主に年配のおじ様方に、孫のように可愛がられていたのだ。

たのだ。

そうして、それなりに受付嬢として立派に育つたよね——と、ようやく自負できるようになった矢先、またしてもあたしは戸惑う羽目になった。

今度の異動先は、会社の花形とも言える秘書室。

受付に配属されたときも、なんで？ と思つたというのに、またも何故？ の秘書嬢。これまで以上に才色兼備の華々が集う部署にやられた、ペンペン草のあたし。一体誰の何の嫌がらせなのかと頭を悩ませ、人事担当者を呪つたりしたのは秘密です。

当然、異動初日は秘書室の先輩方にもすごい目で見られた。

南条専務率いる同期の中には、出世株がわんさかいる。同期連中は入社当時から仲が良く、その中にオマケなあたしも混じっていたから、周りからの風当たり、強いなの。あたしが女の花形職に就けたのは、専務にカラダでお願いしたからじゃないか、などと、陰で言われたりした。

もう、そういう陰口を聞くたびに半笑いつていうか？ そんな手が通用する相手じゃないだろう。そもそもあたしごときのカラダである男が言うことを聞くものか。嫉妬に狂つた方々は冷静な判断ができなくて困る。見当違いもいいところだつての！

キーボードを叩き壊す勢いで、データを打ち込み出したあたしの鬼気迫る様子に、恐々とした視線が集まるのを感じた。

——確かに、あたしは彼と親しくさせていただけます。ただでさえあのひと、他人に冷たいし。あまり関わりのない方々からすれば、あたしといるときの彼は、気を許しているように見えるのだろう。

しかし、ジョーシキ的に考えてみてください。

高卒、資格はあるけれど取り柄なし、人混みに紛れたらドコにいるのかわからなくなる、そんなモブキャラの女を、あなた方の王子様が相手にされるとお思いですか。

自分で言っていて虚しくなるけど。

アレだ、彼にとってあたしはよく言えば妹、言葉を飾らなければ子分みたいなものなのだ。

入社したとき、周りは大卒の年上のひとばかりで、お酒も飲めず化粧も馴染まない子どもだったあたしは、随分みんなに可愛がられた。というか、いじられまくっていた。

専務もその例に漏れず。あたしも若さゆえの無謀さで、からかってくる彼によく噛み付いていたし、なついてもいた。彼は彼で、自分に突っかかるお子様めずらしかったのだろう——何というか、珍獣扱い？ 突っついて反応を楽しむという失礼な扱いをされていて。

親しく見える態度はその延長線上にあるんだってば。現に、他の同期だって未だにあたしを妹分として見てるし。

あたしが秘書室に来てから、専務を決めていなかった専務がママに顔を見せるようになったとか、あたしにばかり仕事を頼むとかいろいろおっしゃいますが、便利に使われるだけなんだって。

立場は違っちゃったけど、同期として接してきた時間があるから、専務にとって頼みやすいとかこき使いやすいのだと推測する。

なんといつても、あたしは皆様方のように彼に声をかけられて浮き足だったりしないし、立て続けに用事を頼まれたって、アタシ、虫貞にされてるかも！ なんて都合のいい勘違いをしないから。

皆様、ひとをどう言うより、まず自分の行いを改めたらどうだと思いません、ハイ。あたしは真面目に仕事してるだけです。

正直ここに配属になったとき、六年間頑張って受付嬢をやってきたことは無駄になるのかなあ、とガツカリしたけれど、案外役に立つことがあったのは嬉しい誤算。

受付で接した取引先の方がこちらを覚えてくださったっていたおかげで、来社されたときに声をかけていただけると、こちらもどういった方なのかわかるので、どういう繋がりしていま会社がどことどういう事業を進めているのか、すぐに把握できたりするし。重役専任以外の、フリーの秘書社員は事務仕事が主になるから、本来持っていたパソコンスキルもやっと活かせるしね。



それに何より、どんな無茶なお客様でも笑顔でいなしてきた経験があるため、ちょっとやそつとの意地悪くらいじゃへこたれない根性も身に付いている。こうしてイヤガラセで仕事を回してくださるおかげで、短期間でかなりスキルアップもしたと思う。嫉妬様々よ、ふふんだ。

「じゃあ木内さん、お先に失礼するわね。それ、ちゃんと仕上げておいてよ」

『ふんっ』と、きつと異性の前では見せないであろう、意地悪キヤラそのものの高慢な笑みを見せて、主任はバッグを手にした。ただいまの時刻、十八時三十五分ナリ。

他の方々が気の毒かつ愉快そうな視線をこちらに向けつつキツチリ定時で帰宅されたあと、あたしが残業体制に入ったのを見届けて、主任は帰宅の言葉を発したのだ。

「はい、お疲れさまです。また月曜に」

気のない挨拶をするあたしを忌々しそうに睨んでから、彼女は踵を返す。集中したいから、とつと帰ってくださるほうがこつちとしては有難い。――が。

「……あら、お疲れさまですう」

ドアを開けた瞬間に誰かと出くわしたのか、背後から、一オクターブ高い主任の声がした。

「お疲れさまです。失礼、木内は」

続けて、ここからでも腰砕けになりそうな魅惑的な声があたしを呼ぶのが耳に入り、相手が誰なのか悟る。やば、遅くなるって連絡すんの忘れてた！

「木内は残業なんです、段取りが悪くて困るんですよねえ」

シラツと都合のいいことを吐く主任に、微妙に殺意を覚えた。あんまり迂闊なこと言わないほうがいいですよ、墓穴掘るから。例えば、その残業がそもそも誰の仕事だったのかとか、ねえ。

助け船を出すつもりもなかったけど、入り口でいつまでも立ち話されると気が散っちゃうので、あたしは後ろを向き、声を張り上げた。

「専務、ごめんなさい、まだかかりそうなので先に行ってくださいー」

「木内？」

わずかにこちらを窺うような気配。

いやいや、いらんこと言わんでいいからこの場は去ってくださいませんかね。

あたしたちのやり取りにチャンスだと思ったのか、愛想のいい笑顔で主任がズイと身を乗り出す。

「あのー、南条専務、よろしければ、私が代わりにー……」

「お言いやがった、ひとに仕事を押し付けといてよく言った！ その根性、いっそ尊敬に値するよ！ なんて心の中でツッコミつつも、仕事の手は止めない。」

「いえ、私も少し仕事が残っているのでそれを伝えに来たんです。木内、終わったら連絡しろよ」

さて専務はどうするのかと思ったら、スッパリザックリ主任の申し出を切り捨て、それだけ言って姿を消す。

あははー、アレは仕事残ってるなんて嘘だな。ホントに態度がハッキリしたひとだよ。こちらにかかる迷惑を少しは考慮してくれ、オッサン。

専務にふられた主任は、無関心を装うあたしに刺すような一瞥ひとげつをくれ、苛立たしげにヒールの足音を響かせて帰っていった。

……あのひともなあ、あの若さで主任なんだから仕事はできるのに。専務に色目なんか使わなければ、もっと重宝されると思うんだけどな。——つて、ああもう。七分も時間を無駄にした。

気を取り直して、キーボードに向き直ると、また背後にひとの気配。

いかげんにしてくれ、今度は誰だと顔をしかめて振り返ると——何故か、彼が戻ってきていた。

「専務？」

「めずらしいな、お前が仕事を残すなんて」

さっきのことなんてなかったみたいにそう言って入ってくる。あとどれくらいで終わ

る、と訊きねながら彼は適当に椅子を引っ張ってきて、あたしの後ろに陣取った。

「えーと。専務が邪魔しなけりゃ一時間くらいで終わりますよ」

何だよ邪魔つて、と軽く笑い、じゃあ俺も残ってる分片付けよう、と持っていたノートパソコンを膝の上で広げ始める。

……何故そこで仕事を。すっごく落ち着かないんですけど。

「……ん？ どうした」

密かに様子を窺うかがっていたのに気づかれてしまう。

いや、どうした、でなくてですね。そんな一メートルも離れていないところでわざわざお仕事なさらなくても。しかも、何だか視線を感じるんですが、あたしの後頭部にハゲでもありますか。どうしてそんなに機嫌が良さげなんですか。

疑問が頭を巡るものの、しかし、口から出てきたのは全然関係のないことだった。

「他のみんなはもう先に行ってるんですか？」

一瞬何を言われたのかわからない、という表情をした彼は、少し考えてから、「ああ」と頷く。

「今日は俺とお前だけだから」

え？ そうなの？ なら、急がなくてもいいっかー。

待たせている専務に対して微妙に失礼なことを考えると、わずかに頭に引っかかった

不可解さは後回しに、あたしはデータ入力に戻った。一点集中型なんだよ。だから、あつさり背を向けたあたしを、彼が苦笑しつつ見つめていたことなんて、まったく気づいていなかった。

## 2

ひたすら無心にキーボードを叩いて、どのくらい経ったのか。叩き壊すのかというほどの力強さで打ち込みを続け、ようやく最後のページに辿り着く。跳ねるように最後の文字を勢いよく叩くと、まいったかこんちくしょうとエンターキーを押した。

「……お前、書類の内容覚えてるのか？」

じ、と書類を眺めてはだだーっと入力する作業を眺めていたらしい専務が訊いてくる。ファイルを一度保存して、打ち込んだ内容に齟齬がないかをチェックしつつ、いいえ、と答えた。

「瞬間的に記憶してるだけです。でもって、覚えた分一気に打ち込んで、あとでこうして確認するやり方のほうが合うんですよね」

「前年度の収益推移はどこに書いてあったかな」

「五ページ目の真ん中あたりに」

用済みになった紙のデータを指しながら言うと、覚えてるじゃないかと呆れ顔。ですから瞬間記憶なんですってば。

「にしても、この書類……」

書類を見た専務が呟く。気づいちゃったかな。そうか、専務にも関係ある内容だもんね。室長も、会議に誰を出席させるか事前に報告してるだろうし。

しかし主任の行いをチクするのも小学生のようでイヤなので、そ知らぬふりを決め込む。彼も追及することはなく、チラリとあたしを見たあと、ヤレヤレといった様子で処理済みのボックスに書類を置いた。オトナな対応で助かります、専務。

誤字脱字その他突っ込まれるようなミスがないか細かく見直し、言われたとおり主任のパソコンに送る。さてさて、会議のときまでに主任がデータを見直すか否か。ふふふ、焦るがいい——なんて、黒い喜びが頭をかすめた。

「お待たせしました、さらにもうちょっとお待ちくださいね」

背後にいる専務に言いながら、電源を落とす準備。疲れて奥のほうが痛む目をほぐすように、コメカミを揉んでいると、イキナリ頭を大きな手で掴まれた。

「……なんじよーさん？ もしもしー？」

「アタマ凝ってそうだなあ」

そのままグイグイと頭に彼の指が食い込む。おとおおお？

「お、あ、あ、あ、あ、きも、ち、い、い、い、い、う、お、お」

「どっから声出てんだ」

奇妙な声を出したあたしにぶはつと噴き出した専務は、色気ねえなあと掴んだ頭をわしわし掻き混ぜて揺らした。あたしに色気求めてどーすんですか。

「あー。ちょこつと楽になりました。スママセン、お待たせして。行きましょーかー」  
パソコンを閉じて立ち上がる。

グルグル肩を回しながら、腹ペコで倒れそうですー、と訴えると、またおかしそうに笑う。

何だかな。ホントに最近他愛なく笑うよね。社内ではあまり笑顔を見せない彼が、こややってあたしの前であけっぴろげな笑みを見せるから、余計に誤解されるんだろう。しかし、声を大にして言いたい。

彼は、あたしに、笑いかけてるのではなくて、あたしを、笑っているのだよ！と。わかりますかー？ この違い。面白いことなど特にした覚えもないのに、なんでだ。

専務は最近ちょつとネジが緩んでいると密かに思ってたたりする。そのネジの緩みが、何故かあたしといるときに顕著だから、みんなイロイロ噂するんだろうけど。

まあ、同期っていつても年は六つも違うし、立場も全然違うのに、よく二人で飲みに

行っているから誤解されるのも仕方ない、かもしれない。

言い訳を聞いていただけののならば、入社時に同じチームで研修を受けているうちに、年の差なんて気にしなくなっただけ、飲み会だって、最初は他の同期連中も一緒だったんだもの。去年の結婚ラッシュでみんな片付いちゃって、付き合ひ悪くなってるだけで。

仲間の中であぶれてしまった、彼氏いない歴更新中のあたしと、選り取りみどりすぎたまだ独り者の専務は、仕方なく二人ぼっちで飲んでるんだよ。

専務があたしを誘うのは、気軽に声をかけても何の弊害もない相手だから。

あたしにとつても、酔わされてお持ち帰りとか、立場を笠に着てのセクハラとか、万が一にもそんな心配せずにすむ相手だからね。できれば、彼との間に男女の感情を持ち込みたくないんだ。

獲物を横取りされるとか、無駄な勘繰りだつてば。専務があたしをどうこうなんてあがるワケないし、こっちだってそんな畏れ多いこと考えもしません。身の程は知っています。

「ああ、木内、そっちじゃない」

通用口に行こうとすると腕を取られ、そのまま普段使用しないエレベーターまで連れていかれる。

「ん？ どこ行くんスカ」

「駐車場。今日は車だからな」

飲むのに車とはこれいかに。まあ、代行でも頼むんだろうと、問うまでもなく納得。つていうかー。……ヤバイ、専務の車に二人きりで乗ったなんてことが秘書室のお姉様方にバレたら、抹殺される……！

そりゃね、昔から遅くなったら送ってもらったりしていた。彼の車に乗るのも初めてじゃあない。けれど、『なんしょーさん』が専務になつてからは、さすがにあたしも分をわきまえて、遠慮していたのだ。周囲に示しがどうのとか言うひとがうるさいから、とも言っけど。

キョロキョロと慌ただしく周りを窺い、彼が紳士的にもドアを開けてくださった瞬間、シユバツと素早く助手席に乗り込んだ。

早くっ早くっ！ 早く車を出せえええ！！

「何だ、おかしな奴だな」

身を縮めるように席に座り、ひたすら誰も来ませんように、発見されませんようにと祈つてるあたしの気持ちも知らないで、呑気なことを彼は言う。

「おかしかないですよっ、早く出してください早く早くっ」

ベシベシ自分の膝を叩いて焦りをアピールすると、つまらなさそうに専務がほやいた。「ったく、俺の車に乗ってそういう色気のない反応するの、お前くらいだぞ……」

だからですね、なんであたしに色気を求めるんですか、色気が欲しけりゃ他のひと誘

えっつーの。

確かにこのお高そうな、ピカピカの、座席の座り心地も超一級品な車は素敵だ。だがそれよりもあたしは自分の身が可愛い。車にウツトリしてほしけりゃ、危険な状況を脱したあとで、いくらでもウツトリしてやるさ！

「車でハラは膨れませんか！ 早くしないとお腹の空きすぎで、あたしキレますよっ」

待たせておいて、なんちゅう言い草だと思わないでもなかったけれど、自分の命のほうが大事もんね。

あたしの失礼な発言を特に気にする様子もなく、「ハイハイお嬢様、仰せのとおりに」なんておざなりに答えた専務は、それでも楽しい笑みを唇に浮かべたまま、車を発進させた。

「ところで、どこに向かっているんですか？」

会社を出て、夜の街に紛れたところで安心したあたしは、窓の外を流れる夜景に首を傾げる。

てっきりいつもの居酒屋さんだと思ってたんだけど、それなら車は必要ないし、かれこれ二十分は走ってる。あまり遠いところだと困るな。専務がタクシー代出してくれるなら別だけどさ。

「今頃聞くか。もうすぐ着くよ、そろそろ見えるから——ホラ」

……………ホラじゃねえッ!!

専務が視線で示した先にあつたのは、洗練されたデザイナーの高層建築物。近代的なフォルムの建物と、真逆の印象を与える緑の庭園に囲まれた——レイリオールホテルだった。あたしごときの収入では足を踏み入れることなど許されない、質もお値段もハイレベルすぎる場所。

こやつが車を運転していなければ、肩を揺さぶっていたところだ。代わりにシートを激しく叩く。

「せせせ専務っ！ どこ行くんですかどこでご飯食べる気なんですか今すぐ車を止めろオオオ！」

「んん？ 以前レイリオールのフランス料理店で食事がしてみたって言ってなかったか？」

言っていましたよ、言っていましたけれども！ こんな仕事帰りのヨレた姿でホテルディナーなんてイヤすぎるッ！ もっと朝から気合いを入れて、きっちりバッチリ用意して恥ずかしくないレベルに化けてから来るべきところですよ、ここは!!

慌てふためき苦情を申し立てると、専務は目だけでこちらを見て、呆れた声を出した。「……ちよつとは他の心配しろよ……別に困る格好じゃないだろ、珍しくスカートだし」

確かに今日ビミョーに寝坊したから着脱容易なワンピースですけれども！

「食べたくないのか、フレンチ」

食べたいですよっ！ 強固なはずのあたしの抗議は見事に無視され、車はそのままホテルの駐車場へと吸い込まれていった。

ばかー、専務のばかー。

胸元で潰れんばかりにバッグを抱きしめ、完全に拳動不審な動きで、あたしは専務のあとに続く。

ささやかすぎて気づかないほどの音楽が流れる廊下は、基本的に落ち着きのないあたしを所在ない気分させた。ホテル側は、訪れる客に居心地よく過ごしてもらおうと工夫を凝らしているのだろうに、逆の気持ちになってスイマセンと謝らせたかった。こういうところに来るなら来るで、どーして先に言ってくれないの。わかってたら一目散に逃げたのにー。

ホテルディナーに憧れがないわけではない。一年に一度くらいはそういう贅沢をするのもいいよね、と友人と計画を立てたことさえある。でも、だけど、それはさつきも言ったとおり、ふさわしい格好と覚悟を用意してからの話なの！

「木内？ おいで」

ハッと気づくと少し前を歩いていたはずの彼が結構先にいて、振り返ってあたしを待っていた。雰囲気ですっかり畏縮してのろろしてる間に、専務との距離が開いちゃってみたい。慌てて駆け寄る。こんなところで迷子は嫌あー！

あたしはよっぽど情けない顔をしていたんだろう。隣に着いた途端、相手を崩した専務が宥めるように頭を撫でてきた。……だからなんで、そこでナデナデ。

くっそー、どうせ場馴れしないよ、プライベートでこんなところ来るの初めてだよ！  
ギリギリと下から睨みつけても、専務は何の痛痒も感じてない飄々とした笑みを唇に浮かべ、あたしの腰にためらいもなく手を回す。

オヤジ、セクハラ！ なんて、普段なら肘鉄のひとつもお見舞いするところだけど、正直絨毯のフカフカした長い毛足に足が取られがちだったから、支えてもらえるのはありがたかった。そんなにヨタって歩いて見えたのかな。

そのまま、まごつく余裕もなく、滑らかにエスコートされて目的地であるレストランに到着したのだった。

オシャレでオトナな方々が楽しげに、かつお上品に食事をいただいている優雅な空間。『別世界、別世界だよ』とオドオドキョロキョロビクつくあたしをヨソに、専務はススッと寄ってきた黒服のひとに名前を告げる。

「予約していた南条だが」

「お待ちしておりました。こちらへどうぞ」

予約していた南条だが——？ いつの間にそんな面倒なことしてたんですかっ！  
たいそうホッとしたことに、専務が予約していたのは個室席だった。

これでマナーとか人目やらを気にせず食事ができる。と、ちょっとだけ肩の力を抜いたあたしは、差し出されたメニューを見て、再びドンヨリした気分になった。

値段が書いてないんですけどー。

「好きなもの頼んでいいぞ」って、簡単に言うなあああーっ！

わかるようでわかんないカタカナの羅列に目がぐるぐるしてくる。もう泣きそうだし。居酒屋で鳥唐とか焼き鳥盛り合わせとか頼みたいー！

半泣きで睨みつけると、専務は苦笑してあたしからメニューを取り上げた。

「わかった。適当に頼んでやるから、肉か魚か選べ」

「にく」

即答するあたしに、専務が唇をひくつかせる。ええい、笑えばいいよ！

慣れた様子で（実際慣れてるんだらうけど）前菜から主菜副菜まですら注文していく専務に、最初からそうしてよ、と恨めしく思った。

「なんで今日に限ってこんなところなんですかー。キンチョーして食べた気しないですよー」

ナイフを入れるのももつたいないくらい、綺麗に盛り付けられた肉をパクつきながら文句を言う。

食つてるじゃないか、なんて言いたげな目は無視だ。

「うーん。まあ、勝負にはそれなりの舞台が必要だろ？」

勝負？ 舞台？ なんの？ はて？

専務は、キョトンと首を傾げるあたしを見て、目を細める。瞬間、ぞくりと背筋を走つた震えに、あたしはさらに首を傾げた。……なんだ今の？

「美味いか？」

問いかけられてコクコク頷くと、お皿の隅っこに、専務が頼んだお魚を取り分けてくれる。

わあい。お行儀悪いけど、二人きりだしいいよね。こっちも美味しいー。

さつき感じた不穏な気配をすっかり忘れてお料理を頼張るあたしに、堪えきれなくなったのか、専務がくつくつと身を震わせて笑い出した。

専務つてば、今日は笑い上戸なの？ さつきから意味なく笑われてばかりで、さすがにいい加減我慢できなくなってくるよ。

むー、と不満を表すように唇をひん曲げる。そんなあたしを、何故か専務はこちらがドキリとするくらい深い色を秘めた瞳で見つめて——ニヤリとした。

「お前、美味しいもの食わせてやるからって言われてもついていくなよ、俺以外に」

完全にひとを子ども扱っているそのセリフにむくれる。

「小学生ですか、あたしは」

「——意味、わかってないだろ」

……何の？

### 3

「専務専務、これおいしーです、えと……シャンパンだよね？ 結婚式の乾杯のとさくらいいしか飲んだことなかったですー」

あとはクリスマスの子供シャンパンか。一緒にするのも失礼だけだ。

ふくふくしたフルーティーな炭酸系のその飲み物は、お食事のお供に専務が選んでくれたものだ。クーラーに入れてあるボトルにはオールヌーボー調のお花模様が施され、サーモンピンク色の中身が透けて見えてすごく可愛い。瓶ごと持って帰りたい。ちなみ

にどのくらいのお値段なのかは恐ろしすぎて思考の外。考えない考えない。「シャンパーニュ。まあシャンパンでも間違いじゃないが、フランスのシャンパーニュ



地方で造られた発泡性のワインを——」

「うんちくはどーでもよいです、度を越すとせつかくのお酒が不味くになりますー」

長々続きそうな知識の羅列をスッパリ切り捨てた。

そうか、君はワインの仲間だったんだね。知らなかった、シャンパンって単独の飲み物だと思っていたよ。グラスの中で揺れる薔薇色に話しかけるあたし。

うーん、微妙に酔ってるな、と自覚しつつも気分がいいのでさらに口に含む。美味しー。「物知らずに教えてやってるんだろが。——しかし、木内が酒の味をわかるようになるとはねえ」

同じようにグラスを傾けながら、ニヤ、と専務は笑った。

「失礼なー。っていうか、あたしが未成年のうちから飲み屋に連れ回してたひとの言うことじゃありませんよー」

飲めないというのに親睦のためだって、毎回飲み会に参加させられてたんだもん。

まあね、おかげでみんなの輪の中に入っていただけさ。しかもほとんど専務（その当時は専務じゃなかったけど）の奢りだったし。

「酔っ払い、うつつとういしいの！」って邪険にしてくれてたのになあ。飲めるようになったら、率先して酔っ払いとか」

呆れたように言いつつも、空になったグラスに残りのシャンパンを注いでくれる。あ

りがたくいたたくも、文句を言うのは忘れない。

「酔っ払いじゃないですうー」

「お前は酔うと語尾が伸びるんだ。可愛いけどな」

ぞわっと背中を撫で上げるような声に、あたしは一瞬身を震わせた。

ん、何だ、今変な単語が耳に入らなかった？ 気のせい？

油断するとトロンと落ちそうになる臉をばちばちさせながら首を傾げて、気のせいだなと結論づける。

最後の一杯をちびちび味わうあたしの様子を見つめる、専務の顔がなんだか和やかだったので、教えてあげた。

「オヤジくさいッスよ、専務」

「お前……微妙な年頃の男になんつーことを」

だって、久しぶりに会う親戚のおっちゃんみたいだったんだもん、今の表情。

『おつきくなつたなー、んん、で、いくつになつたんだ？』よしよし。なんてね。

いつまでたつてもひとを小学生だと思ってるような感じ。とつくに学校卒業してるつうの！

「お前の制服姿、知ってるからなー」

どこか遠い目になって、しみじみ専務が眩く。

おそらく、野暮ったいセーラー服姿のまま入社に必要な書類を取りに現れた、七年前のあたしを思い浮かべているんだろう。オッサン化した専務を、冷たいまなざしで見つめた。

「もういい加減、子ども扱いやめてくださいよ。確かに専務よりだいぶ若いですけど」  
 だいぶは余計だつて、いつもどおり突っ込まれると思つたのに。

「——そうだな。子ども扱い、やめてやるよ」

専務は謎の微笑みを浮かべて、ふっと吐息に似た笑い声を立てた。

「……何ですか急に、気持ち悪い」

ものスッゴク不審に感じたあたしがイヤ々な顔を見ると、ますますうれしそうに笑う。やっぱりどっかネジが緩んでるよ、このひと。

「……鈴鹿。俺な、来月から南条じゃなくなるんだ」

もう飲む機会なんて一生ないだろう、上質なシャンパーニュの最後の一口。じつくり味わって飲もうと思つていたのに、その唐突な専務の発言で、貴重な薔薇色の液体は口に含んだ途端、ゴキユリと喉に流し込まれてしまった。

あああもつたいない、じゃない——南条じゃ、なくなる？　いま鈴鹿って言った？  
 勝手にひとを呼び捨てに、来月？　え、なに、どういうこと？

「どっかに婿養子にでも入るんですか？」

混乱したまま首を傾げる。今までの名前じゃなくなるって、それくらいしか思いつかない。

「お前一人娘じゃないだろう。——あんな、来生の籍に入るんだよ」

自分でも、バカ面晒してゐるなってわかつたけれど、パカッと開いた口はなかなか塞がらなかった。

来生、それはうちの会社の名で。一代で来生商事を大きくした、一見その辺のおっちゃん、でも実はやるときゃやるよなの社長の名でもあった。そして、来生社長は専務の伯父さんでもある。

——てことは。

「え、じゃあとうとう後継者、やっちゃうんだ」

以前から、噂されていたこと。

後継者のいない来生社長は、甥である南条専務を跡取りとして考えている、と。

噂の真偽を確かめられるたび、今どき世襲でもないだろう、と曖昧な返事をしてきた専務だったけど、実際能力もカリスマ性も文句なしだから、いずれはそうなるんだろうなど、みんな、暗黙の了解で思つてた。

何しろ、当の社長が専務を跡取りにしたがつていたし。

すつとんきょうな声を上げてしまったあたしをたしなめるように軽く睨んで、「まだ

ここだけの話だぞ」と専務は念を押す。

「伯母のな、具合が、少し悪いんだ。伯父は傍にいる時間を増やすために、一線を退くことにした」

専務が、伯父伯母である社長夫婦と仲がいいことは、以前チラリと聞いたことがある。育児放棄気味の実父母に代わり、子どものいない伯父さん夫婦に、実の子のように可愛がってもらっていたと。

彼らがいなければ、マトモな人間に育ってなかった、と内緒話みたいに教えてくれた。うちの会社に入ったのも、実際伯父さん——社長のお手伝いがしたかったからだ。誰にも話してないようなことをあたしに言うのは、口が固いつて信用してくれてるのかなって、ちよつと嬉しく思わないでもなかった。でも。

「……そんな話、あたしにしちゃってもいいんですか」

これってかなりの機密事項。一社員が知っていいこととは思えない。

「ああ。これからのことを考えたら、知っておいてもらったほうが都合がいい」

いやいや、なんの都合？ 色々突っ込みたいことがあるすぎて、何から聞けばいいのかわからない。これからつてなによ？ 秘書だから、人事異動があると忙しくなるってことかな。

「こんなことなら入社する前に、来生になつときゃよかったなと思うよ。あのときは、

鼻屑とかコネとか言われたくないなんて、無駄な意地張ってたから」

自嘲するように言った専務に、でも、とあたしは眩く。

「最初から、なんじょーさんが次期社長だなんて知ってたら、みんな今みたいに付き合えてなかった」

専務が社長の縁続きという事実は彼が隠していたにもかかわらず、わりと早い段階で知られてしまっていた。さすがに同期も最初は戸惑う様子があったものの、結束は固かつたし、なんで隠すんだよ水くさい、と茶化すように文句を言うだけで、距離を置くとか、媚びへつらうとか、そういった態度を取るものはいなかった。なかなかいい連中揃いなのだ。

きつと専務が社長になつても、みんな変わらず支えてくれるに違いない。

あたしがそう言うと、滅多に見られない蕩げそうな笑顔が返ってくる。

……あのですね専務。いくらあたしが対象外といえど、ソレは心臓に悪いです。

「もちろん、鈴鹿も支えてくれるんだよね？」

はあ、まあ、 magari なりに秘書ですしー。同期入社 of ヨシミもありますしねー。

っていうか、なんでさつきから『鈴鹿』呼ばわりなんですか。名前呼びするなどは言いませんけど、専務の声で呼ばれると背中がむず痒いっていうか、居心地悪い感じ……。

座り心地が悪い？ なんか、こう、お腹のあたりがもぞもぞするの。

頬杖をつき、微笑んであたしを見てる専務の謎の視線を避けるように、話題転換を試みた。

「えっとー、えっと、社長夫人、お具合悪いって、心配ですね……?」

「うん、だから、早く安心させてあげたいんだよ。孫の顔見るの楽しみにしてるしな」  
 はあ。孫って飛びすぎ。お嫁さんの顔を見せるほうが先なんじゃないだろうか。

まあ、専務なら、その気になればすぐに相手を見つかるだろうけど——むむ、そうなれば同期で結婚してないの、あたしだけになるんじゃない?

年齢でいえば、みんなより若いからそんなに焦るつもりはない。でも今までまったくといっていいほどその手のことに縁がなかったし、これからはあるとは思えない。仕事にいつばいいいで、積極的に相手を探していく気力もないし。まだ若さで売れるうちに、見合いでもしたほうがいいかな?

……見合いといえば、専務のお見合いからもう一年も過ぎたんだなあ。

去年、専務は突然お見合いをした。確か、相手は取引先の社員さん。小耳に挟んだところによると、専務より一つ年上の、仕事ができてさっぱりした気性の女性だって。

びっくりした。そのお見合いは彼自身が望んだものだという話だったから。

女に不自由しない立場にいながらも、結婚というものを忌避していた彼に、一体どういう心境の変化が、としばらく仲間内では騒がれていた。

あたしはびっくりしたあたしにびっくりして、どうしてかなと思つたら——仲のいいおにーちゃんに置いていかれた。なんて、あるときあたしが覚えた気持ちは、そういうことだったと思う。

残念ながら、当のお相手にはお断りされたんだけどね。

でなきゃ今日だって、こうやって二人きりで飲みなんて来られないし。

専務を断るひとがいるんだ、と感心する一方で、そういう相手だから好きになったのかな、とも思つた。

今度聞いてみようかな、見合いする上での心得とか。それとも、失敗したひとに聞いたらイヤミだろうか。

「飲み足りないだろ? パーにでも行くか」

デザートを食べ終わった頃に、酔いが醒めたあたしの顔を見て、専務が言う。ちなみに専務はザル、いやワクなのでまったく顔色も拳動も変わっていない。

パーとな。レイリオールの最上階にあるパーラウンジっていえば、パーテンダーが素敵なおじ様と評判なアレ? 行きたい、行きたい行きたい行きたい。

……ですが残念、ただいまの時刻は二十三時二十七分、帰らなきゃ終電がなくなっちゃう。

「専務、せっかくですけど終電に間に合わなくなるんで、バーは」

またの機会に、と言いかけたあたしの言葉は、強引に腕を引っ張った彼の行動に行き場を失った。そのまま、エレベーターに押し込まれる。

「専務う〜〜〜?」

「仕事中じゃないんだからいい加減、専務はやめろ。責任なら取ってやるから」

そりゃまあ、タクシー代を専務がもってくれるなら、あたしに否やはありませんけれども。

エレベーターの浮遊感に、微妙に足にキていたあたしはふらつく。当然のように肩に回った手が、よろけた身体を支えてくれた。

あくまでも、専務の触れ方はさりげない。女性の扱いに慣れているんだろう。かぼつたりエスコートしたりする仕草はいやらしさやまるで感じさせず、自然に受け入れられる。

男慣れないあたしは、ふいに触られたりするとつい構えちゃうところがあるんだけど、専務に対してはそれが無い。彼があたしにとって（あるいはあたしが彼にとって）、まるきり気を使わなくていい相手なんだってことを証明してると思う。

でも、他のひとはそんなこと、わかんないだもんね。

もちろん専務のことは、みんなが言うようにイイ男だと思う。男の知り合いの中でも、

おそらく一番に位置するだろう。

第二次性徴期に縦方向の発育がイマイチだったあたしが見上げるほどの身長。バランスのよい手足の長さ。無表情だと冷たい感じがする端正な顔立ちは、笑顔になると、失神者続出もの。

また、仕事に関する能力の高さは、あたしが一番評価するところだ。

何があっても専務がいたら大丈夫って安心感がある。彼が上役でよかったと思わないひとはいないだろう。

……そっか、社長になるんだ。専務より、さらに雲の上のひとに。

そうしたら、さすがにもうこんなふうには飲みに行ったりできないだろうな。

ひやかされたり、勘繰られたりするの嫌だったけど、気安く出かけられなくなるのは、ちょっと、寂しいかな……

#### 4

バーラウンジはレストランよりさらに大人の雰囲気満点なところでございました。

入店したあたしたちに、先客様方がチャリチャリと視線を向けてこられます。ええい、

場違いだつづうのはわかつてるよ！ イイ男の隣にあたしのようちんくしゃがいてスママセンね、コンニャロウ！ ……いかん、被害妄想が。

これまた見目麗みめうるわしい店員さんに案内され、窓際の席に落ち着いて、あたしはふうっと深いため息をついた。

専務といるのは楽しいの。こんなに年も立場も違うのに、話だつてはずむ。上下関係を意識していない、ただの同期だった頃は何の気兼ねもなく言い合ってた。傍にいたけど、彼が会社にとつて重要人物になってからは、周りの目が厳しくなった。傍にいただけであれこれ言われたりもして、あたしは彼から一步距離を置くようになった。

以前友人に、専務にときめいたりしないの？ と訊きねられたことがある。

まあ、当然の疑問だよ。

白状すると、憧れめいた恋心を抱いていたことはあります。

だって高校出たての小娘だったんですよ。それまでガキっつい男の子ばかりだったのが、イキナリ大人のお兄さんたちの中に放り込まれたんですよ？ しかも多少アレなひとでもスーツ効果でカッコ良く見えるっていうのに、専務ってば誰もが認めるイイ男なんですよ？

フェミニストなんだか女好きなんだか、彼はお子ちゃまなあたしにも普通に優しくかつたし。

そりゃ反応が面白いからって、からかわれるのはしよっちゅうだったけど、なんていうかな、ひとを貶めるようなからかい方は、絶対にしなかった。

よくいるよね、気を引きたいのか優位に立ちたいのか、ただ単に無神経なのか、ひとの嫌なこと、気にしていることをワザとあげつらつて、笑う奴。その場が盛り上がるから、楽しくなるからって、他人を笑ひ者にする奴。

負けず嫌いのあたしは、自分の納得のいかないことはとことん追及する性格だったから、学生時代いい加減な男子とよくぶつかっていた。そのせいか、攻撃されることも多くて。

それは決して陰湿なものじゃなかったけれど、やっぱり、自分が不器量なことや身体的なコンプレックスを揶揄やゆされるのは傷ついた。

専務や同期のみんなは、そんなこと悪ふざけでだつて一切しなかった。

リーダー格である専務が、他人を貶めることを、嫌っていたからかもしれない。

ただ一人高卒で物慣れないあたしを気にかけてくれて、仕事に関しては厳しいけれど、ちゃんとわかるように教えてくれたり、服装や髪型を変えたらすぐ気づいて褒めてくれたりした。

のほせないほうがおかしいと思う。

——だけど同時に、あたしは身の程つてもものを知っていた。

オトナで、仕事ができて、偉いひと（予定）で、イイ男な専務が、子どもで、ペーパーで、その辺によくいる女の子のあたしを、好きになってくれるわけがないって。

それはまったく正しく、ときどき見かけた専務の恋人はいつも、素敵な大人の女性だった。

彼の隣に立つても見劣りするどころかより一層輝くような、自分に自信のある、同性から見てもイイ女って思えるひとばかり。万が一にも勝てるわけない。

あたしは幸いにも子分として気に入られていたから、それでいいやって、すぐに諦めて、同期の一人として接するようになった。

まあ、そんな素敵な彼女たちとも、専務ってば長続きしてなかったけどね。

今思うと、本命がいたんだから、当たり前かあ。……その肝心な本命には、見合いまでしたのにフラれちゃったけど。

でも、それから恋人を作っていないってことを考えたら、まだ好きなんだろう。

スゴいな、この専務がそこまで好きになるなんて。いいな、そんなに想ってもらえるって。

あたしだって恋人が欲しくないわけじゃない。さつきも言ったけど縁がないだけで。わかってるのだ、ただ待っていても相手はやってこないっていうのは。

今まで友達の「紹介しようか」ってハナシ、気乗りしなくて全部断っていたけれど、

ほちほち考えたほうがいいのかもしれない。ボンヤリしてるという物件からどんどん売れていくし。高望みできるほど、女としての自分を高く見積もってもいい。

よし、思い立ったが吉日、明日、友達に電話して合コンの予定がないか聞いてみよう。それが一番手っ取り早い。社内で相手を探すのも今更だし、ちょっと恥ずかしいもの。そうしよう。

ほどほどのあたしに合う、ほどほどのひとでいい。こんな高級ホテルで食事とか、お洒落なバーにエスコートとか、できなくともいいんだ。

あたしが自然体でいられる相手なら。

考えがまとまったら何だかスッキリして、知らない間にニッコリしていた、らしい。「さつきから百面相だな」って専務の言葉で気がついて、頬を押さえた。

男を捕まえる算段をしてたんですよ、とは言えず、誤魔化すようにあたしは窓の外を見て、改めて専務に笑いかける。

「なんか、宙に浮かんでるみたいでクラクラします。すごい、キレイ」

バーラウンジの窓は全てガラス張り。ぐるりと夜景が見渡せ、暗めの照明とポツリポツリと足元に埋められた小さな明かりが、白いテーブルとスツールを淡く照らしている。まるで、宇宙空間にいるみたい。

「気に入ったか？」

嬉しそうに訊くから、あたしも素直に頷いた。  
 カウンターにいるおじ様、噂に違わずカッコイイし。カクテルも、めちゃうちゃ美<sup>お</sup>味<sup>い</sup>しい。これ味わっちゃったら、しばらく居酒屋カクテル飲めないよ。連れてきてくれた専務に感謝、だ。

頬を緩めたまま外を眺めていると、やわらかい声で名前を呼ばれる。  
 瞬<sup>まはた</sup>きして顔を戻すと、専務がポケットから何かを取り出してテーブルに置くところだった。

「……？」

目の前の艶やかな赤いビロードのちっちゃい箱を見つめる。

専務の手なら、まるっと握り込めそうな大きさ。これって指輪のケースみたい、なんて思っ顔を上げると、じっとあたしの反応を見ていた、彼の深い色の瞳とぶつかった。  
 ——気づけば、心臓がものすごい緊張状態に置かれていた。

研究発表の直前のような。

お化け屋敷に入るときのような。

某ジェイソンが現れるキャンプ場で一夜を明かすハメになったときみたいな（いや、そんな状況に陥<sup>おち</sup>ったことはないけれども！）。

本능が、全力で、逃げると叫んでいた——のに、間に合わず。

「結婚しようか、鈴鹿」

獲物を捉<sup>とら</sup>えた鷹の目で専務様がそうおっしゃられるのを、アホ面で聞いてしまった  
 あたしがいたのです……

は、はああああっ!?

## 5

『一体全体いま何が起こっているのですか、隊長！』

『鈴鹿隊員、現実逃避は時と場合によるぞ！ 事実を見据えろ！』

『は、隊長！ 現在専務どのはおもむろにビロード張りのリングケースから、上品な、それでいて可愛らしさを備えた指輪を取り出して、自分の指にはめようとされております！ ちなみに小さなダイヤに囲まれた緑色の石は、エメラルドかと思う次第であります！』

『エメラルド、それは鈴鹿隊員の誕生石だね。まさしくそれは婚約指輪と見受ける！』  
 婚約指輪あああ!?

「ぎゃあっ！」



脳内で仮想隊長と会話をしていたあたしは、専務に取られていた手をビクツと引つめた。

「……鈴鹿」

指にソレをはめる寸前で阻止されたのが気に入らなかつたのか、彼が低い声を出す。

あたしは自分の左手を胸に抱え込み、ぶるぶる首を振った。

「なっとなっとなに考えてんスカドッキリにしたってタチ悪いっスよ！」

ひどいひどいひどい、専務はこんな冗談しないと思つてたのにー!!

あたしが混乱して捲まくし立てる言葉に、専務の瞳がすうつ、と細くなつて。

「……ひどいのはどっちだ？　ここまでお膳立てしてまだわからないってワザとか、ああ？」

「ひいっ」

強引に、隠した手を取り戻される。ぎゅうと薬指に押し込まれる、輪。

あああああ。絶望して、あたしは何故かビツタリサイズのソレを見た。

おそろおそろの専務を見上げると、彼はまだ捕まえたままだったあたしの手の甲に、キスをして——ニヤリと笑う。その、鋭い瞳に射い竦すくめられた。

（ひいひいひいっ！　たいちよー！　隊長っ、捕獲されたような気がするのは何故でありますか、返事をください隊長ー！　あつさり白旗振つて投降しないでたいちよお

お!!)

現実逃避を続けるあたしの指に、やわらかいものが押し当てられて——歯を立てられる感触。ビクンと肩が跳ねる。

かつ、噛まれた……!!

「……鈴鹿。結婚、するよな？」

こんな至近距離で犯罪的な声を出さないでくださいー！　っていうか、よな、って何ですか決定ですかYES以外は許さねえぜってことですよねそれってー!?

「すーずーかー。返事は？」

頭に血が上りすぎて、脳みそが茹であがるかと思つた。

フェロモン全開の声で囁ささかれて、正気を保つのが難しくなる。

ぞくぞくつと、お腹が痛くなるような感じがして、専務に全部、投げ出してしまいうに、なる。

外の夜景はキラキラ、中の照明はユラユラ、ムード満点の舞台でプロポーズ中のカッブル、きつと他のひとから見たらそんな感じ。

しかしその実体は。

「……鈴鹿、俺のこと好きだよな？」

指輪をはめられた指を、輪郭をなぞるように撫でられて。みぞおちの下のあたりに響

く声が、あたしの思考を混乱させる。

だからなんで、よな？、ですかやっぱりYESしか聞かねーぜって聞いかけですよ  
ここで首を横に振ったらあたしどうなるのいやでも頷いたらさらにどうなるのどうなる  
のあたし!! がっぷり首筋に食い付かれてペロリと食べられる直前って感じがするの  
は気のせいですかー!!

迂闊に答えられん、と悟ったあたしは一気に言った。

「好きか嫌いかで言ったらヤハリ入社当時から付き合いですしソナーする専務様で  
もあらせられるので前者です、と答えるしかないのですが!」

奪われた左手を必死に取り返そうとしているのに、専務はニッコリ笑ったままものす  
ごい力でもってそれを許さない。ひんやりしたリングの感触が、体温でぬるくなって、  
違和感がなくなっていく。そこから、侵食されるような、気分になる。

こんな違うのに。間違ってるのに。

専務があたしにこんなこと言うのも、そんな瞳で見ると何かの間違いなんだから。

この指輪が、あたしの指に馴染むような気がしているなんて、絶対に認めない。

むむむと唇を引き結び、専務から視線を逸らすあたしに、ふつと苦笑混じりのため息  
が落とされる。

「……まあいいけど。鈴鹿はツンデレだからな。あとでゆっくり言わせてやるよ」

いやあああああっ!! 誰がツンデレ、っていうかあとでつてナニ、それでもつて  
やっぱり返事はYES強制なんですわえええっ!!

くい、と軽く手を引かれて席を立つ。逃げることを考える前に、腰を抱かれて専務と  
身体が密着して。

「……………!!」

頭のとっぺんにちゅーされた!

「行くか」

現状把握に努めようとしつつも、ついでにいいことを考え逃避するあたしを楽しそう  
に見て、彼はクスリと笑う。——専務は、あたしが今まで知らなかった男の瞳をしていた。  
ううん。今までも、ときどき、こんな瞳で見られていた。

違うって、思い込んでいただけ。——ずっど?、いつから?

そのまま、腰を抱かれてバーをあとにする。犯行現場を一部始終見られていたのか、  
店を出るところで、店内にいた皆々様から「おめでとございます」なんて祝福の声か。  
ち、違……!! たたたたいちよおー、鈴鹿隊員、捕獲されたでありますっ……!!

「せせせ専務っ！ どちらへお行きあそばすんでございますかっ」  
 半ば引きずられるようにして、ホテルの廊下を進む。あたしはまだ混乱していた。頭の中はどろどろでいっぱい。

なんで、なんで、専務、どうしてあたし——？

考えたら、もしかしてそうだったのかな、って思える今までの専務の行動。そんなこと少しでも思うのも、自意識過剰で、我ながら恥ずかしい、なんて、そう、思っていたのに。

だって専務が、あたしなんかを——だなんて。まさかのまさかだ。

でも、あたしを促し<sup>うなが</sup>つつ歩く彼に迷いはない。逃がすかとはかりに、肩に回された手は強い。あたしの指にリングはびったりはまっついて、結婚なんて言葉を出されて、専務は上機嫌で。

やっぱり、そういうことなの？

動転してばかりのあたしに、専務は当然のように言う。

「責任取って言っただろう。部屋取ってあるから」

へ……？ つんな!? セキニンってそーゆー責任かッ！

「ちょ、ちょい待ちっ、部屋って……!」

「喜べ、スイートだ」

喜べるかー！ ツツ!!

え、え、えええええツツ！ マジで？ ホントの本気で？ 部屋ってことは今の時間からして泊まるってことで、泊まるってことはこの状況からして……うううそだー!!  
 できないっ、無理っ、恥ずかしくて死ぬっ、それ以前に専務、あたし相手にそういう気になるのー!?

あと少いでエレベーターホールという廊下の角で、ピタリと足裏を床に貼り付かせたあたしに、専務が不審な顔を向ける。

「鈴鹿?」

……だってわかんない。なんで専務が急にこんなこと言い出したのか。なんであたしなのか。

結婚、なんて、専務にはもつとふさわしい相手がいるでしょう?

わかんないわかんないわかんない。どうして。

じっと俯<sup>うつむ</sup>いて自問しているあたしを、専務が見下ろし、仕方ないなど優しいため息を

つくのを感じた。

ふんわり、長い腕が身体に回る。

警戒するより安心を与えられるその腕に、やわらかく抱き締められていた。

「……お前が嫌がるようなことはしないから——おいで」

甘い甘い、脳みそまで蜂蜜が染みそうな声で、言うから。

本当の、ホントのことなんだって、信じそうになる——

専務の言葉に頷きそうになったそのとき、エレベーターホールから突然賑やかな声が響いた。

「ほら、やっぱりこっちだつてば苑生くん」

「透子さん、前見て——」

ほすんと軽い衝撃が伝わる。前方不注意の女性が専務の背中におつかつていた。

あたり、なんて呟いて彼女はぶつけた鼻を押さえる。連れらしき男性が慌てて駆け寄ってきた。あたしはといえば、専務の犯罪級フェロモンの呪縛から正気に戻り、公共の場で抱き合っていたという状況にうろたえていて。まだ背中に回ったままの彼の腕から逃れようとジタバタした。

は、離せ、はーなーしーやがれっ！

「前よく見てなくて、ごめんなさ、……南条さん？」

うなじが見えるくらいに潔いショートボブを揺らして、彼を見上げた女性はきよとんとしていて。専務の名前を呼んだ……てことは、知り、合い？

肩に回された手にぎゅつと力が入った気がして、あたしは顔を上げる。

「——葛城さん。奇遇ですね」

ふ、と紳士モードになった専務の、あたしに見せるものとは、また違う笑顔を見てしまった。

「お久しぶりです、その節はどうも」

さっぱりした笑みで、『カツラギさん』と呼ばれた女性は軽く会釈する。

——どちら様ですか？ なんてわざわざ訊かなくても、あたしはその答えを知っている気がした。

「お知り合いですか、透子さん」

彼女の連れらしき青年が身体を屈めて彼女の耳元で訊ねる。モデルみたいに背が高く、眼鏡をかけていてもその下の顔の美しさがわかる彼は、たぶんカツラギさんの恋人——なんだろう。自然に傍に寄り添い、触れ合える近さにいることから、それがわかる。

彼氏に問いかけられた彼女はハツとして慌て出す。

「う、うん、うちの会社のね？ 取引先の方でっ」

あからさまに何かありますよ、という怪しさ爆発の態度で言い訳をする彼女に、「そ

うですか」と綺麗な笑顔を見せる彼氏さん。やべー、やつちまった」と気まずげな表情を隠そうともしない彼女は、目を引く美人というわけじゃない。言ってみれば、ふうのお姉さんなだけけれど、ぱっと見せる表情が可愛くて印象的な女性だった。きつと、そうだ。

今まで専務の隣にいた女のひとは全然違うタイプだけれど、でも、きつと、このひとが——以前専務が自ら望んだ見合いの相手。すうっ、と頭の芯が冷えるのがわかった。——ああ、そうだ。何を、勘違いしてたんだろ。

かつてないほど頭が冴えて、あたしは今日の専務の行動の理由を全て理解した。専務は彼女が好きだったけれど。それが叶うことがないのは、目の前の二人の様子からわかる。どんなふうにも専務が断られたのかは知らないけれど、悪足掻きすることもできないくらい、彼女たちの絆は強いんだろ。

この専務が諦めるくらいなもの。  
だから、きつと、誰でもよかった。

専務は急いでいたから。来生の籍に入り、病身の夫人を安心させてあげるために、早く結婚相手を探したかった。彼女じゃなければ誰だつて一緒。気心が知れていて、それなりに好意があつて、万が一にも勘違いなんてしない相手。それを探して見回してみたら、——そこにあたしがいたんだ。

たまたま、その条件に当てはまる、あたしが。

専務なら、相手に困ることはないだろうに、どうしてあたしなんかを選んだの。慣れてないから、あつさり頷かせられると思つたんだろうか。現に、頷きそうになつてしまつていたけどさ。あたしなら、愛されてるなんて勘違いしないって、他に好きなひとがいる専務に愛してほしい、なんて望んだりしないって、見込まれたんだろうか。

——そんなの、買い被りすぎだ。だって、あたしは、あたしは——  
「まさかこんな場所で葛城さんにお会いするとは思いませんでした。どうしてこちらへ？」

動揺なんて微塵も感じさせない声音で専務が訊ねるのを、閉じた思考の外で聞いた。カツラギさんは、照れ臭そうに笑つて彼の問いに答える。

「せっかくレイリオールに来たんだから、噂のバーに行かなきゃって思ひまして」  
「今日はプライベートフェアに参加してたんです。——もしかして、そちらも？」

微妙に専務の質問からズレた彼女の返事をフォローするように、彼氏さんが繋げた。今までここにいないように思われていたあたしに彼らの視線が向いて、ビクリとする。見られていたのは、腰に回された専務の腕と——あたしの左薬指にはまった指輪。違ふ、と言うより先に、そつのない仕草で専務があたしを引き寄せた。

「ええまあ、そのようなものです。プライベート——という、近々？」

「いやいやいや！ 違いますよつ、単に話のネタというか、知り合いから招待状をいただいたんで、無駄にするのもつたないから！」

おめでとうございます、と微笑んだ専務に、カツラギさんが慌ててそれを否定。だけど真っ赤になつている様子からすると、満更でもないんだらう。否定された彼氏さんはちよつと不服そうだ。

ぐるぐるとお腹の中で熱く苦い気持ち掻き混ぜられている。

カップルの幸せぶりを見せつけられるのも、つらいくせに笑つて祝福なんてする専務を見るのも、嫌だった。

——これ以上、この場にいたくなかった。

専務が二人に気を取られて今なら、手を振り払つて逃げることもできたらう。

「だけど」と、冷静なもう一人のあたしが囁く。

——だけど、じゃあ、あたしが感情のままに振舞つたら、残された専務はどうなるの。

——好きな女性とその彼の前で、恋人と思われている相手に置き去りにされるなんて、そんな恥をかかせていいの。

自分がとても惨めだと思いつつも、ぎゅつと拳を握りしめてその場に踏みとどまった。せめて、二人がいなくなるまでは。

断つた見合い相手のツレだというのに、キラキラした瞳で興味津々にあたしを見てい

る彼女に苛立ちを感じるけれど、今までの受付業務で培った、とびきりの笑顔をまとう。

「——わたくし、木内鈴鹿と申します。いつも南条がお世話になっております」

バッグの中から名刺を取り出し、彼女に渡した。

「おんなじ会社の方なんですネ」と何故か感心したように呟く、無邪気なんだか無神経なんだかわからない彼女を、笑顔を張り付けたまま見つけた。専務は、一瞬で社交的笑顔の仮面を被つたあたしに、疑問のまなざしを向けてくる。

黙つててくださいよ。お望みどおりの役を演りきつてみせますから。

あたしが怒る筋合いじゃないけど、専務の気持ちを考えたなら、ものすごくこのひとに対して意地悪な気持ちになった。こんなの、あたしが一番嫌だと思つてる感情なのに。

あともう少し、彼女たちという時間が長かったら、とてもイヤな女になつていただろう自信がある。でもその前に、微妙な雰囲気は彼氏さんが気づいて、「あまりお二人の邪魔しちゃだめですよ」と彼女に立ち去るよう促した。「あ、そうだね〜」なんて素直に笑う彼女に、あたしは（天然か）と評価を下す。余計始末が悪い。天然で鈍感（確定）な彼女より数倍は気配りができそうな彼氏さんに、お願いだからそのひと教育し直して、と無言で念を送った。

あたしたちが先ほどあとにしたバーに向かう二人の後ろ姿が見えなくなるまで、専務もあたしも、何も言わなかった。

しん、とした廊下の空気を、空調機器の動作音が静かに震わせている。  
妙な虚脱感を覚えて、あたしは専務の腕を振り払った。  
「帰ります」

## 7

いつか、王子様が。

並みいる美姫を尻目に、目立たない地味な村娘をその心根だけで選んでくれる。使い古されたシンデレラストーリー。そんなおとき話みたいなことは現実には起こらないって、もう何度も思ったはずなのに。知っていたはずなのに。期待した自分が恥ずかしい。専務の態度に、少しでも、彼があたしを想ってくれているのだと信じかけていた、自惚れの強い自分が情けなかった。

そんなことあるわけがないって、期待するだけ無駄だって、今まで何度も言い聞かせていたのに。

今日の専務のまなざしがいつもより甘くて、うっかりその気になるところだった。危うく思い上がるところだった。

## 立ち読みサンプルはここまで

浮腫んでしまったのか、まるで外されたくないというかのように、きつく指にはまっていた指輪を無理矢理引き抜く。眉をひそめてあたしを見ている専務と、視線が合わないようにしながら、「お返しします」とソレを彼の上着のポケットに入れた。

近場で間に合わせなくても、専務にもっとふさわしいひとがいるだろうから、あたしなんか選ばなくてもいいよ。

何も言わない彼に背を向けて、それでも、みっともなくならないように背筋を伸ばしてエレベーターホールへと向かう。

なんにも言い訳しないってことは、追っかけてこないってことは、そういうことなんだよね。

早く。早く、一人になれるところに行きたい。

できるなら走って、さっきまでの出来事を全部ここでふるい落とし、みんな忘れてしまいたい。

見ないふりしてた自分の気持ちを、心の奥の奥、深いところに、もう一度埋めてしまわなければ。

もう、浮かび上がってこないように。

沈めて埋めて、埋めて固めて、自分でもどこにあるかわからないように、均してしまわなければ。